

ナショナルバイオリソースプロジェクト
中核的拠点形成プログラム（オオムギ）平成23年度運営委員会議事要旨

日時：平成23年5月12日 13:30～16:00

場所：岡山大学資源植物科学研究所 小会議室

参加者：

委員長	掛田 克行	三重大学生物資源学部
課題管理者	佐藤 和広	岡山大学資源植物科学研究所
	木原 誠	サッポロビール（株）
	小松田 隆夫	農業生物資源研究所
	河瀬 真琴	農業生物資源研究所（欠席）
	柳沢 貴司	作物研究所
	辻本 壽	鳥取大学乾燥地研究センター
	山崎 由紀子	国立遺伝学研究所
	加藤 鎌司	岡山大学農学部
	村田 稔	岡山大学資源植物科学研究所（欠席）
	前川 雅彦	岡山大学資源植物科学研究所
	武田 真	岡山大学資源植物科学研究所
	吉田 英哉	岡山大学資源植物科学研究所（欠席）
	最相 大輔	岡山大学資源植物科学研究所
オブザーバー	森脇 和郎	NBRP 推進委員
	平田 裕美	NBRP 事務局
	アコスタ真紀	NBRP 事務局

議 事

報告事項

1. 平成22年度経過報告
2. 平成23年度事業計画

協議事項

1. 今後の運営方向について
- その他
リソース見学（圃場）

配付資料

- 資料1 平成22年度事業結果説明書
 - 資料2 平成23年度事業計画書
 - 資料3 平成23年度実施機関情報
 - 資料4 平成23年度事業計画書（別紙）
 - 資料5 平成23年度ゲノム情報等整備プログラム応募書類
 - 資料6 バイオリソース整備戦略に係るヒアリング調査
 - 資料7 バイオリソース整備戦略に係るヒアリング調査の概要（取りまとめ様式）
 - 資料8 NBRP 植物課題・意見交換会 議事要旨
 - 資料9 同上資料1
 - 資料10 同上資料2
- 参考資料1 オムギリソース配付実績および資料

参考資料 2	平成 22 年大麦・野生植物資源研究センター運営委員会議事要旨
参考資料 3	NBRP オオムギリソースのバックアップについて
参考資料 3	学会展示ポスター
参考資料 4	情報センターの経過報告
参考資料 5	JSPS 二国間交流事業共同研究による麦類収集計画
参考資料 6	3.11 震災による影響とその後の対応について（情報センター）

議 事

冒頭、出席者から自己紹介、挨拶があった。

引き続き、掛田（委員長）・三重大学、佐藤（課題管理者）・岡山大学資源植物科学研究所より挨拶があった。

報告事項

1. 平成 22 年度経過報告：

上記配付資料のうち資料 1 に沿って、課題管理者が平成 22 年度の実施内容を説明した。

2. 平成 23 年度事業計画：

資料 2～5 に沿って、課題管理者が平成 23 年度の実業計画（ゲノム情報整備プログラムを含む）の申請内容を説明した。以下の点について、質疑応答が交わされた。

- ・ オオムギのゲノム・シーケンシングの現状、将来の公開に向けた準備状況等について質問があり、課題管理者から今年ドラフト配列が出る予定であること、NBRP のゲノム解析の採択が望ましいことが説明された。
- ・ 国際コンソシアムで解析する米国品種と NBRP でリソース開発を進めている国産品種の相違について質問があり、課題管理者から両者とも醸造用であるが、米国品種が旧満州由来、国産品種が欧州由来でゲノム構成は異なると説明があった。

協議事項

1. 今後の運営方向について

1) 資料 6 に沿って、バイオリソース整備戦略に係るヒアリング調査（事業の継続性、リソースの在り方、利用者拡大、後継者育成）について、課題管理者より説明があった。資料 7 に沿って、バイオリソース整備戦略に係るヒアリング調査（第 2 期開始時の設定目標、その達成状況、研究動向の変化、リソースの到達像）について、課題管理者より説明があった。特に遺伝子単離後の研究成果の応用・展開をどのように考えているかについて質問があり、研究側（遺伝子単離）と品種育成側（系統育成）との接点について議論があった。主な項目は次の通り。

委員（専門コムギ）質問：第三期の計画は遺伝子単離に特化した内容となっている。オオムギリソースの重要な使命である品種育成の材料提供について、遺伝子単離では品種を育成することは出来ないが、そのような方向性を強調しすぎではないか。むしろ

る系統の評価が重要である。コムギリソースとの連携についてどう考えるか。

委員（ビール会社育種）コメント：醸造にかかわる遺伝子を遺伝解析によって同定、単離することは醸造用オオムギの育種にとっても重要である。

委員（農水省育種）コメント：DNAマーカーを利用した育種を進める上では、目標とする形質についての単離を希望している。政府が求めているように、今後自給率を上げると、必要なのはムギ類の増産である。この場合不適地にも作付けをする必要があり、寒冷地や痩せ地、病害多発などより多くの形質が必要になる。

委員（農水省オオムギ研究）コメント：ゲノムの時代となって、全ての系統をシーケンスすることも可能となる時代はやがてやってくる。遺伝子はそこに存在しており単離するという用語も適切ではなく、遺伝子と形質を結びつける作業となる。岡山の系統に関する特性情報は重要であり、それが今後充実することを望む。不良環境の現地へ送って評価してもらうことなども考えても良い。

委員（大学オオムギ研究）コメント：遺伝子が単離されて形質に関する理解が深まることは育種にとっても重要である。

課題管理者回答：プロジェクトの評価が配付数と論文数なのでライフサイエンス課に提出する書類の内容もそれに対応した方向性となっている。しかし、産業植物の遺伝資源なので、有用な形質にかかわる評価が重要であることは認識しており、公表していないが実用形質に関する評価データは蓄積されている。遺伝子が単離されれば、その遺伝子についての系統の多様性を評価、公開することはますます重要になると考えている。タイピング解析の実施に、NBRP予算を計上することは可能である。コムギのモデルとしてのオオムギは重要であり、オオムギリソースの活用を期待している。

2) 資料8～10に沿って、第三期のNBRP課題の検討に関連して要請された、植物課題全体の連携についての検討状況について説明があった。

委員（イネ研究）コメント：イネのキーワード形態形成は収量性にかかわる形質を扱おうとしており、ストレス耐性も結局は収量性の向上を目指すもので、作物系リソースの共通キーワードに収量性が挙げられる。

その他

1) 参考資料1～5によって、課金制導入後のリソース配付の概要や実績、岡山大学資源植物科学研究所大麦・野生植物資源研究センターの運営委員会の議事内容、NBRP オオムギリソースのバックアップ体制の現状、日露二国間共同研究事業によるカザフスタンでのムギ類遺伝資源探索(H23年度予定)について報告があった。

2) 参考資料6に沿って、3. 11震災による影響とその後の対応について、国立遺伝学研究所・山崎委員より報告があった。

3) 3. 11震災対応について、オオムギリソースを利活用した提案、活動の可能性について提案があり、議論された。

以上（書記： 最相大輔、補足 佐藤和広）